

# 入試分析 国語

## 【総評】素直に解ける問題。例年並みの易しさ。

国語で高得点を確保できた受験生が、今年もきっと合格を勝ち取る！

1・2が漢字の読み取り・書き取り、3が物語文、4が論説文、5が評論文という構成は今まで通り。受験者平均点は80点前後を推移している国語だが、今年も素直に考えれば正解できる問題が多く、落ち着いて解き進めれば90点以上を確保することも可能だ。

## 【問題分析】

### 1・2 漢字の読み取り・書き取り(1問2点×10問=20点)

1の「喝采」の読み取り、2の「(母の)キョウリ」の書き取りができれば、漢字の問題は全問正解できる。なお、2の書き取りはすべて小学校で習う漢字であった。

### 3 物語文(1問5点×5問=25点)

すべて選択形式の出題。問1から問5まで、すべてが傍線部の前後に描かれた内容で判断できる素直な問題。中高生を登場人物として扱った小説からの出題が多い都立共通問題の国語だが、今回は動物を愛する小学生の話。自然保護活動をする大人に混じって生き物の命や自然の尊さを学んでいる。新たな発見や未知への好奇心といったテーマは非常にわかりやすく、選択に迷う問題もあまり見られなかった。

### 4 論説文(1問5点×4問+200字作文10点満点=30点)

問1から問4までが選択形式の問題。今年も比較的わかりやすい内容だった。「人間は賢い」ことの根拠は何か。道具の使用はその一つだが、私たちは高度な技術をあまり理解せずに道具を使っている。技術を抜いてしまえばヒトの子どもサルの子供も能力的な差はあまりない。しかし人間は観察を通して学ぶ「社会的学習」の能力に長けている。社会の中で先人から学び、後世に伝えてきたことが人間の賢さの根拠なのだという話だ。問5の作文のテーマは「文化を受け継ぎ発展させること」。中学生は学ぶ立場として先人の知恵を受け継いで自らを発展させている最中だから、今回の作文は容易に書けたことだろう。

### 5 古文を伴う評論文(1問5点×5問=25点)

すべて選択形式の出題。言語事項の問題は定番の「ない」の識別の1問のみ。都立高校の出題はいわゆる古典の問題ではない。引用される古文にはすべて現代語訳が付いており、古語の意味を問う問題もその現代語訳から探すだけだ。あまり馴染みのない内容に惑わされず、落ち着いて解き進めればよい。過去問や模試で何度も練習して、都立高入試独特の出題に慣れておくことも大切だ。

## 入試に向けての学習アドバイス

文法や言語事項以外、残念ながら中学校の授業はあまり役に立たない。ただ都立高入試の共通問題は国語が非常に易しい。確実に得点を稼ぎたいのなら、話題の新書や古典を扱った随筆を習慣的に読んでおくことはおすすめしたい。(白洲正子の著作は都立高入試での出題率が高く参考になる。)

なお、北進ゼミナールの授業ではテキストを使って、普段あまり自分からは読まないようなジャンルの論説文を中心に解く機会を多く設けている。実は、これが一番手っ取り早い入試対策かもしれない。